

「近畿圏で2-3割、関東では4-5割の建設系廃棄物の受け入れ量が減った」。

こう話すのは、中間処理業を営むある経営者。ここ数年、木質チップ生産業は儲かるという見込みがあり、比較的許可取得が容易な5㎡未満の施設を建設した新興のチップ生産業者は、設備投資に見合った集荷に達しておらず、大半が赤字経営に陥っていると、いう話を聞く。

少しでも多くの木質廃棄物を確保するため、他社より処理料金を下げ、一時的に取扱量を増やしても、大手業者との体力勝負になれば息が続かず集荷が減少。結果的に、さらなる収支悪化を招いてい

## 業者新興する切れ息 高まる期待からのヤシ

いている。

国内ではないが、中部電力は、かねてより建設中であったマレーシアのボルネオ島サバ州東部で「パーム椰子(ヤシ)房バイオマス発電事業」の第1拠点(出力1万キロワット)となる施設が完成、営業運転を開始した。

マレーシアは世界でも有数のパーム油生産国で、ヤシからの調達には事欠かないという。同発電事業では、近く稼働する第2拠点を合わせると、年間で約24万トンのヤシがらを利用するとしている。

同発電事業は、CDM(クリーン開発メカニズム)プロジェクトとして国連に登録済みで、中部電力は、電力販売などで収益を得るとともに、2012年までに約200万トンのCO<sub>2</sub>クレジット(排出権)を獲得する予定である。(つづく)

る業者が少なくない。

大手需要家の調達

窓口企業の中には一

時期、運賃込みで1

キル当たり10円近い

価格で広域的に集荷

を図る動きもあり、

混沌とした状況が続